

木屋瀬の一番熱い夏



今年も盛り上げるぞお〜 祇園祭 GION



北九州市立長崎街道
木屋瀬宿記念館
運営協議会 広報部
北九州市八幡西区木屋瀬
三丁目16番26号 (〒807-1261)
TEL.093-619-1149
FAX.093-617-4949

木屋瀬最大のイベントの一つ、令和8年の筑前木屋瀬祇園祭が近づきました。今年1月15日に須賀神社の社務所が漏電により焼失する不運に見舞われましたが、社殿から境内の参籠殿、隣接地の長徳寺、その他の民家は少し離れていたため、類焼を免れ幸いでした。社務所の火災でお宮の資料や祭祀神具の一部は焼失しましたが、氏子有志による後片付けによって現在は更地となっております。氏子総代会では社殿焼失の対策を検討中ですが、祭りは例年通り7月11、12日に執り行われます。

今年の一上山は赤山で本町、二上山は青山で改盛町が務めます。5月9日には、両当番町と

氏子総代役員が集まり、今年の祇園祭の立ち上げが行われました。現在、山笠会館と両当番町が山笠の台飾りを協議し、人形や台飾りを決めて制作を開始しています。制作にあたり「坊洗い」「台からげ」「台ならし」を経て、飾り付けを行います。

7月11日の祭り当日、朝9時の花火を合図に当番町の山笠事務所から駆け足で、赤山は興玉神社下の遠賀川に行き、青山は扇天満宮下の遠賀川で「お汐井とり」を行い、須賀神社に持ち帰ってお祓いを受けます。その後、神社から山笠と共に各山笠事務所へ運び、山笠事務所の祭壇に供えて事務所開きが行われます。休憩・昼食ののち、午後からいよいよ巡行を開始します。

町内の巡行、夜の神社へ勇壮な山笠奉納、翌日の両山笠揃つての集団山笠巡行、夕方の追い山、夜の宮入で祭りは最高潮を迎えます。宮入は祭り最後の行事で赤山と青山は、山笠を神社に勇壮、さらに綺麗に入れるかを競うのです。

祭りを安全かつ円滑に行う為に、両山笠のコースや運行方法の協議する掛合い、各町内から選ばれた通行車両と山笠を引く子どもの保護係、通行車両誘導のための交通係が山笠の安全な運行に努めます。山笠事務所では、祭り本部との連絡や通行時間に合わせて、お茶や水運び、賄い担当は、山笠の帰着に合わせて食事の準備を行い、祭りを支えます。多くの方々の力で祇園祭は支えられて成り立っておりますので、皆様方の御理解と御協力をお願いします。

長崎街道木屋瀬宿記念館運営協議会
広報部長 藤

政文

予告!!
企画展「むかしのどうぐ展」
くらべてみよう、いまとむかし
毎年恒例の夏休み期間中、昔の道具を展示する企画展を7月18日(土)より開催いたします。ワーキンヨップなどの企画を準備しています。乞うご期待下さい。



企画展

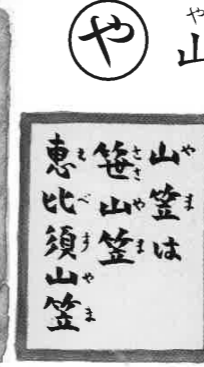


「こやのせ画文集」
瓜田惇(淡彩画個展)
木屋瀬出身の淡彩画家である瓜田惇二の、淡く繊細なタッチで描かれる木屋瀬の風景画を展示しています。現在では見ることのできない木屋瀬とその周辺の懐かしい風景から、将来失われていくであろう貴重な風景まで、約30点の作品を展示します。6月21日(日)まで開催しております。

ホームページ
https://koyanose.jp

いろはかるたのご紹介

「ひろば北九州」に掲載されておりました、紅屋泰助氏(故 柴田泰助氏)の「筑前木屋瀬今昔歳事記」内、木屋瀬いろはかるたについて紹介・引用させていただきます。



やまは 山笠は 笹山笠 恵比須山笠

毎年十二月の子供ゑびす(かしら)行事には、笹と松と紅白の幟と幕で飾る二基の子供山笠が奉納され、頭(かしら)の子供たちが、加勢人・先加勢人・万加勢人と呼ばれる先輩らと共に、師走の寒風の中を町内曳きまわします。

ま 町のはずれの構口

宿驛往時、本陣のあった木屋瀬宿には有事に備え、宿場の出入り口には構口が築かれ街道には見通せぬ鉤状に家屋は鋸の刃状に配置して矢止めを設けるなど、本陣を中心に守りを固める工夫がされていました。感田町には当時の面影を残す構口の石積みも今も残っています。



令和8年度 木屋瀬芸術祭を開催しました

5月の連休に開催する芸術祭では、今年も音楽、講演会、朗読会、伝承芸能と多彩な企画で皆様をお迎えしました。

1日目は木屋瀬中学校吹奏楽部と、木管五重奏グループ「アンサンブル・ルーム」のコンサート。2日目の午前には日本経済大学教授・竹川克幸氏と秋月街道ネットワークの会事務局長・佐藤尚隆氏、午後は淡彩画家・瓜田惇二氏の講演会、朗読グループ「きょうはきょう」の朗読会。3日目は筑前各地の盆踊りの披露とシンポジウム、豊前三毛門神楽の披露を行いました。また、なみでも企画があり、賑わいました。来年度の開催もご期待ください。



令和7年度 長崎街道ひなまつり

《木屋瀬宿〜立場茶屋銀杏屋》

今年も2月〜3月の期間中、長崎街道木屋瀬宿記念館と、旧高崎家住宅、立場茶屋銀杏屋、江戸あかりの民藝館の4館連携でひなまつりを開催しました。古いおひなさまから趣向を凝らした展示・飾りつけが来場者に好評でした。ご協力いただきましたボランティアの皆様におかれましては、来年度以降の開催についても何卒よろしくお願いたします。



会場：長崎街道木屋瀬宿記念館

こやのせ 宿場町木屋瀬。伝統を受け継ぎ、次世代を育む長崎街道木屋瀬宿記念館。

文化発信の寄せ太鼓。こやのせ座発、全国行き。

「音と人が一丸となる町、木屋瀬」前編

フアゴット奏者 浦野さやか



歴史ある町並みが今も残る木屋瀬。北九州市出身でありながら、その場所に足を踏み入れたことのない私が初めて木屋瀬駅に降り立ったのは二〇一八年五月五日。

ドイツ留学を終え、帰国した私は、あることがきっかけで木屋瀬の文化や地域活動を長年支えられている、木屋瀬宿記念館運営協議会の理事長の山田靖さんとのご縁で、演奏会を開催することになったのである。

ドイツに10年住んでいた私は、正に浦島太郎状態。10年の間、数回帰国することもありましたが、町の風景も道も大きく様変わりしていて、10年の長さを感じました。

地元で音楽活動をしたい！ もっと北九州に音楽を広めたい！

しかし、何をどう始めたらその様な活動ができるのだろうか、そんなことを考えている最中、知人の紹介で山田さんとのご縁をいただいたのです。それから9年（二〇二〇年開催中止）の間、ゴールデンウィーク期間中に開催している「木屋瀬芸術祭」にて、こやのせ座のステージに立っています。

日頃より各地で演奏活動している私ですが、その中でも「こやのせ座」

は特別な場所です。どこか懐かし、温かい空気が漂う町、木屋瀬。人のぬくもりを特に感じるこの出来るこの場所で演奏できることに毎回喜びを感じています。

こやのせ座で音を奏でると、不思議とその空間全体が楽器と一緒に鳴って聞こえているのを感じます。歴史ある建物だからこそその響きや雰囲気があり、他所のホールとは違う特別な空気がそこにはあります。一般的なコンサートホールの場合、演奏中に奏者がステージから客席後方のお客様の表情まで細かく見られることは少ないのですが、こやのせ座では、皆様が一丸となり表情を見ることが出来ます。ステージと客席の距離が近いというのも一つですが、もうひとつの大きな理由は、スタッフの皆様のご尽力があるからなのです。実は演奏会中、ホールの照明担当の方が客席とステージの明るさを状況に応じて細やかに調整し演出してくださっています。また客席の椅子の配置や、ステージ上の奏者の位置など、奏者が客席の隅々まで見渡せるように配慮しており、挙げればきりがなく、隔たりに、隔々まで配慮の行き届いた準備で私たちを迎えてくださっています。

私は、この「木屋瀬独特の空気感」は一体なんだろう、と考えました。そしてそれは、地域の皆様や、スタッフの皆様が一丸となってイベントを作り上げ、この土地の地域性や建物自体の持つ雰囲気があるからこそ、お客様との距離がグッと近くに感じられ、温かい演奏会に繋がっているのだと気付きました。

(後編に続く)

浦野さやか プロフィール

北九州市出身。12歳で北九州市ジュニアオーケストラ入団、フアゴットを始める。福岡女学院高等学校音楽科卒業。大阪芸術大学演奏学科卒業後、渡独。ドイツ国立カールスルーエ音楽大学卒業。同大学院修了。ドイツ国立フライブルク音楽大学アドバンス修了。2006年よりPhilharmonie der Nationen (ドイツ) に在籍。北九州市にてソロリサイタルやディナーショーを開催し好評を得る。日本をはじめ、ヨーロッパ各地、ロシア、中国などで多くの音楽祭に出演。帰国後、室内楽、オーケストラ、ソリストとして幅広く活躍している。木管五重奏団Ensemble Roomメンバー。

職員異動のお知らせ

この度、北九州市役所の4月人事異動に伴いまして、木屋瀬宿記念館でも職員の間がございましたことを報告いたします。今後も運営を通じて地域文化の振興・継承に努めて参りますので、前任者同様よろしくお願ひ申し上げます。



館長 有馬 孝徳

文化発信の寄せ太鼓。こやのせ座発、全国行き。

楽しみな一日視察研修

一 唐津街道見学

私たち史料保存会では、毎年1回視察研修を行っています。令和8年3月16日の今回は、木屋瀬から福岡を通り唐津に至る唐津街道を訪ねてみた。この思いから計画しました。赤間宿、畦町宿を巡り、東郷神社にお参りして、日本海海戦記念碑の丘に登り、下って津屋崎千軒を歩いて昼食、その後宮地嶽神社に参拝して青柳宿を巡る見学コースです。

まずは赤間宿。一六〇三年頃に整備され、長さは約500メートル、町筋には、町茶屋、問屋場、旅籠、商家が並び往來する旅人の喉を潤すための7つの辻井戸が掘られていました。五卿西遷の碑、辻井戸の名残を見て、白壁や格子窓などの建物を眺めながら歩きました。出光佐三の生家と赤間館は曜日の都合で見学できませんでしたが、昔の赤間宿の趣を感じました。次は畦町宿。ここは宿場町ではあるけれど、昼食や休憩のために作られたため、宿泊施設やお茶屋はなく商売が殆どでした。歩いて行くと寂しさの中にのどかな気分を感じることができました。

次は日露戦争で活躍した東郷平八郎を祀っている小さな東郷神社、それから、日本海軍がロシアのバルチック艦隊を破ったという日本海海戦記念碑の丘に登って玄界灘を望み、当時に思いを馳せました。丘を下って津屋崎千軒を散策、古い家並みの奥にある豊村酒造旧醸造場施設を見学しまし

第3回 みちの郷土史料保存会 活動報告

た。ここは国指定重要文化財、明治期に九州最大の醸造量を誇り、主屋は二階に高欄を回し神棚を配して、土間から見上げる天井の曲がった丸太を縦横に何段も重ねた姿が重厚でした。昼食後は、宮地嶽神社へ。右の階段を上り振り返ると、道が一直線に海に延びて太陽がその先に沈む姿が有名です。大きな注連縄の下でお参りして視察研修の無事を祈りました。

最後の青柳宿は、博多から十三キロメートルの位置にあり、博多から上る旅人が最初に休泊する宿場です。一六〇五年頃から上町ができて始めて、一六五三年に新町が加わり宿場として整いました。長さは444メートル。出入り口に構口あり、藩主が宿泊するお茶屋や町茶屋がありました。江戸時代には84軒前後の宿があり、黒田藩、唐津藩、薩摩藩も通りました。今はわずかに宿場町の面影を残す街道筋を歩いて行く歴史情緒を感じました。

木屋瀬みちの郷土史料保存会
会長 高倉 照男



海の道むなかた館から視察研修、意見交換会を実施

宗像市には、世界遺産「神宿る島 宗像・沖ノ島と関連遺産群」のガイダンス施設と宗像の歴史を紹介する博物館施設を兼ねた、海の道むなかた館（以下、むなかた館）があります。むなかた館には地域学芸員の市民ボランティア制度があり、3月19日に運営委員会が視察研修にやってきました。

当日は、むなかた館から来た10名が史料館と伊馬春部生家を見学し、協議会の三団体（みちの郷土史料保存会・まちなみ案内の会・筑前木屋瀬街づくりの会）との意見交換会をこやのせ座で実施しました。

むなかた館の地域学芸員は78名が登録し、館内の展示解説や体験学習の指導、学校の世界遺産学習・ふるさと学習の指導支援などを担当しているとのことでした。三団体からは、それぞれ現在の活動の質疑説明を行いました。意見交換では、個々の活動状況や交通費支給などの運営方法、唐津街道赤間宿と長崎街道木屋瀬の時代から続く両地域のつながり、まで話題が広がり、魅力ある町並み・地域に人を惹き付ける方法について意見を交わしました。

他都市のボランティア組織と交流する機会は貴重であり、今後、日頃の活動にフィードバックが期待されます。

